教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第８号（通算第１４号）
平成２６年１１月２８日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

「虹」(大崎中学校３年３組、１１月６日)

防災教育が「地域の絆」を深める

小中一貫教育推進課指導主事　髙橋誠一郎

今年度から全県で防災教育プログラムに基づく「防災教育授業」の実践が本格的に始動しました。市町村によって取組に温度差がある中で、三条市は各校の充実した取組、特に洪水災害の授業実践において県内外から高い評価を得ています。100 年に一度と言われる規模の豪雨災害を 10 年間に二度経験した地域であることで、防災授業が数多く実践されているという理由だけではないのです。

各校の授業実践や実践者の方々との話合いの中で見えてきたことがあります。それは、三条市の防災教育が単に「避難するだけの防災」という概念でとらえられているのではなく、「地域で生きるとは…、その土地に住むとは…」というアイデンティティーに深く切り込むような授業づくりがなされているということです。三条市がめざす防災教育は『地域の恩恵を実感しながら生きていく中で、時折襲い来る自然の災いをやり過ごすためのお作法を身につけること』であり、人がいろいろな人生の機微の中で「その地に住まうことの意義」を深く見つめることでもあります。このことを授業実践者が明確に把握できていることが高い評価につながっている理由であると確信するのです。

さて、11 月で全学区の「深めよう絆スクール集会」が終了します。異学年交流活動や講師の講話など工夫ある計画で『人と関わる力』＝絆を結ぶ力（社会性）の育成に向けての活動が展開されました。防災教育において、防災・減災のためにとるべき行動として『自助・共助』を学びます。それは、人と関わる力＝社会性が不可欠となることも同時に学ぶことになります。つまり、地域の人々とともに（地域コミュニティーの中で）地域で生活しながら災いをやり過ごして生きていく逞しさを身につけるためにも「深めよう絆…」の精神は極めて重要であるということです。

地域の人と人との関わり合いの中で自分という存在の意義を見つめ、地域の恩恵に感謝しながら災いをやり過ごして生きていく力をつける防災教育。これが最近の流行として終わるのではなく、将来に渡って粛々と展開されることが最も大切な姿勢であると考えます。どうでしょうか、来年度の「深めよう絆スクール集会」のテーマとして「地域と共に学ぶ防災（自助・共助）の技」というのも大いに意義深い活動になると思うのですが。

不登校児童生徒コーディネート力向上研修　～１１月１３日～

この会は５月に実施した「不登校児童生徒アセスメント研修会」と７月に実施した「不登校児童生徒コーディネート力向上研修」のまとめとも言える研修会です。講師は引き続き、中越教育事務所学校支援第２課ＳＳＷの長田美智留様！市内２７校２７名が受講しました。

最初に講師が「カンファレンスシートを用いたケース会議の持ち方」について説明しました。そして黒板に以下のように記されました。

支援の話し合い～今日のポイント～

（支援の）ニーズ・・・に合った質問をする。

↓　質問する　＝　新しい視点の発見

　質問される ＝　事例に対して具体的な興味を持つ

　『知りたい、分かりたいとの想いは大切』

事例を見立てする（アセスメント）

↓

支援の具体化　⇒　完璧な案でなくてよい。まずは支援の動きを作るつもりで。

『みんなで試して　吟味して　また試す』

中学校区ごとのグループで、１つの事例を『①各自が作成してきたカンファレンスシートに基づいて説明⇒②質問⇒③具体的な支援策の検討』という手順でケース会議を行いました。

その後、ケース会議で話し合った「具体的な支援策」（◇）をＡグループから順に発表し、支援策の妥当性・修正点や支援に当たっての留意点など（◆）について講師が指導しました。以下その一部。

◇保健室登校の子どもを教室に戻すために、別の場所を使ったらどうか。

◆校内の努力で保健室まで入れるようになったがその先なかなか進まない状況。子どもの同意を得ることが大切。子どもと「○学期までに～～ができるようになる！」のような目標を共有する。子どもが自分の居場所を確認し、プロセスを知っていると不安を乗り越えられる。

◇不登校のきっかけは理想の自分と現実の自分とのギャップであった。そこで、今のその子ども（ありのままの自分）に寄り添い、学校全体でその子どもを見ていく。

◆子どもにスポットを当てているところがよい。なりたい自分になれないことが苦しい。「あなたは今、その途中にいるんだね。」とギャップを感じていることを褒める。エネルギーが足りない子どもに寄り添い、ギャップを埋めるために、校内で誰がその役割を果たすか決めて対応する。

最後に、３回シリーズの研修会のまとめとして長田先生から“ミニ講話”をいただきました。

回を追うごとに話し合いの内容が深まってきました。また、カンファレンスシートの活用も進みました。県内各地で行っていますが、三条市の教職員のカンファレンスシートの記入内容が群を抜いています。上手に使うと校内・中学校区間で共有できるので大いに活用してほしい。以下主なもの。

①みんなで考えるというシステムは、同じ立場の人との横のつながりができるので、いろいろな人と力を合わせて取り組み、不登校の解決に向けて前進します。

②家族関係の中で不登校になるケースでは、その子が苦しいと思っていても外部に発信できない。「応答力のない保護者＝応答できない状況の保護者」と捉え、応答できる状況にするには何が必要か考え（福祉、医療等）、支援を考える。

③親の離婚・死別を経験した子どもは深いダメージを受けているので丁寧に対応する必要がある。

【受講者の声】　※評価「役に立った：８５％」「どちらかと言えば役に立った：１５％」

・子ども、親、教師の困り感をそれぞれ整理して考え、その解消のために組織的に動くことについて学ぶことができました。カンファレンンスシートやアセスメントについてもっと学びたい。

・「あなたを見ている私がいるよ！」という講師のお話を聞いて、細々でもそう伝えることができる自分でいたいと思いました。そのためには広い心で生徒に接していきたいと思いました。

・カンファレンスシートを用いた事例発表にグループ内で質問してもらい、改めて自分の困り感を確認できたり、校内での対応の方向性が間違っていないことが確認できたりして良かった。

第9回　小中一貫教育推進委員会

標記の会が１１月２５日に栄庁舎で開催されました。

協議事項１「三条市共通の小中一貫教育に係る点検・評価」実施方策及びアンケート内容の改善について

第８回推進委員会と第２回マネジメント研修会でいただいたご意見を踏まえ、再修正案を提案しました。（紙面の都合で改善点のみ記載）

①「保護者対象アンケート」は対象児童生徒の保護者全員に調査を行う。ただし、提出いただくのは一世帯に１枚（市内小中学校に通学している一番上の子どものみ）とし弟妹の提出はなしとする。

②「教職員アンケート」は市教職員名簿に記載されている教職員を対象とする。ただし、常勤でないスクールアシスタントは除く。小中一貫教育コーディネーターは教職員全員から確実に回収する。

③アンケートを実施する際、学校によっては、補足、具体事例の添付資料を配布してもよいこととする。

委員から真摯なご意見をいただきました。それを踏まえ再度修正したものを各校にメール送信し、意見をいただきます。さらに１２月２日の定例校長会議でご意見をいただき、１２月４日に完成予定。「第３回マネジメント研修会」（１２月９日開催予定）で説明し、アンケート用紙を配付します。

協議事項２　平成２７年度「第１０回小中一貫教育全国サミット in 三条」の開催に向けて

【日時】１日目　平成２７年１０月２２日（木）午後　授業公開　中学校区協議会
　　２日目　　１０月２３日（金）全体会　プレゼンテーション　シンポジウム

【会場】１日目（１０月２２日）は以下の授業公開校。
　第一中区（文科省委託協力校、一体校）　第三中区（連携型モデル校区）
　第二中区（一体校）　大島中区（文科省委託協力校　連携型小規模校区）
　２日目（１０月２３日）は嵐南小・第一中。
　　※12:30～13:10　全体会場で９中学校区のポスターセッション

【備考】１日目（１０月２２日午後）は小教研及び中教研の一斉研修日に設定できないか！
　　２日目（１０月２３日）は全市一斉の休業日とし、全教職員がサミットに参加する。

委員からいただいたご意見は、後日立ち上げる「実行委員会」で検討し、サミット開催の企画立案や課題解決に生かしていきます。

小中一貫教育全国サミットで発表…大島中学校区

１０月３０日、３１日に「第９回小中一貫教育全国サミット」が姫路市で開催され、齋藤哲生教頭(大島小)と渡邉三津教諭(大島中)が第３分科会で発表しました。第３分科会のテーマは「特色ある学校づくりを基盤とした小中一貫教育」です。それを受け、『小規模校における人間関係づくりを中核としたボトムアップ型の取組』というテーマで発表しました。

まず三条市の小中一貫教育の導入の背景を説明し、それを踏まえて大島中学区では人間関係づくりに重点を置いた小中一貫教育を平成２２年度から推進していることを発表しました。次に、人間関係づくりの取組の中心である「小小交流」「ゴミ拾いウォーク」「島中絆タイム」を発表しました。これらの活動を企画・立案する際、担当部会の意見を反映する『ボトムアップ型』にしたことで、小規模校の特長を生かした充実した活動になったこと、教職員の意欲や参画意識が高まったことを発表しました。参会者は興味深そうに聞き入っていました。（※写真上：発表する二人、下：発表内容の一部）

各中学校区における小中一貫教育の紹介　～その６～

下田中学校区

↑名刺交換　↓キャッチゲーム

１０月３１日、下田中学校に、下田中学校１年生と５つの小学校の６年生が集まり、長岡市立越路小学校教諭佐藤裕貴様を講師に迎え、「深めよう 絆 スクール集会」が行われました。講師は、「仲間作りのキーワードは“一緒にやろうよ！”です。」と参加者に呼びかけ、軽妙な語り口で楽しいゲームを次々と進めました。最初は表情が硬かった子どもたちでしたが、ゲームが進む中で次第に打ち解けていきました。戸惑っている小学生を中学生がサポートする姿も見られ、絆づくりが進みました。

講師が進めた“仲間作りゲーム”をいくつか紹介します。

①**名刺交換じゃんけん**：違う学校の人とじゃんけんし、用意してきた名刺を交換して、その後自己紹介をする。

②**じゃんけん列車ゲーム**：敗者が勝者の後ろに付き、列を作る。

③**軍手回しトライアル№１**：軍手を次々に隣の人に手渡し、大きな輪を１周するのにかかった時間を計る。⇒**２分２７秒**

④**握手とりゲーム**：二重の輪になり、歌に合わせて歩く。歌が終わったら、内側と外側の子がペアを作り、握手する。

⑤**キャッチゲーム**：右手で輪を作り、左手の人差し指を隣の子の右手の輪に入れる。「キャッチ」という合図で、右手で隣の子の人差し指を掴む。左手は掴まれないように逃がす。

⑥**軍手回しトライアル№２⇒２分１５秒**　歓声が上がりました！

仲間づくりゲームをしたことで団結が強くなり、絆が深まったことを確認し、集会を終えました。

【１２月以降の主な取組】

・「一貫教育しただ・一貫カレンダー」　・あいさつの日：毎週月曜日に実施

第４０号発行：１２／２４　第４１号発行：１／２８　第４２号発行：２／２６

・教職員アンケート実施　１／１４　・中学校進学アンケート実施　２／３

・第１８回小中一貫教育推進協議会　２／１８

教育の窓　*～前々号で記した教員２校目（昭和５０年代）の続編です～*

町場の学校では絶対味わうことのできない活動をたくさん経験しました。春は全校で山菜採りに出かけました。高学年が低学年の世話をしながら、ふきやうど、わらび、木の芽などを採りました。帰りは６年生が１年生の荷物を持ち、手を引きました。和気に満ちた集団活動でした。夏は水泳に熱中しました。２０ｍプールでの練習では大会になると最後の５ｍで息切れするので、中学校のプールまで歩いて練習に行きました。夕方遅くまで練習したポートボール。市内大会で３位になったことを今でも覚えています。秋は水泳終了後のプールでの鯉釣り大会と全校遠足。冬は有り余る雪で雪遊びに興じ、分校近くの特設スキー場でスキー大会を実施。四季折々の自然を楽しみました。その他、野鳥観察、製本、陶芸、山菜採り、雪掘り、教員住宅暮らし等思い出は尽きません。

私の教員人生の核とも言える学級だより（もちろん手書き）。当時は「たけのこ」というタイトルで月２回発行していました。「書く力をつける」「子どもとの心の交流を図る」ことをねらって始めた５行日記。毎日読んで学級だよりに掲載しました。『今日は先生が来る日。母ちゃんは家の中をきれいにしていた。どうして先生が来るときれいにしなければならないか、不思議だった』『舞台にあがったら心臓ドキンドキン鳴っていました。せりふを言うのがとても恥ずかしかった』

私の教師としての基盤をつくってくれたＩ小は平成１３年度末に閉校となりました。先日、年賀状のやり取りをしている教え子から「母が６８歳で亡くなりました」という喪中の葉書が届きました。複式学級に悪戦苦闘する私を温かく見守り応援してくれた保護者でした。合掌！（M）

※粟ヶ岳や守門岳が白くなり、降雪が間近です。早めのタイヤ交換をお願いします。